

向山恭一君学位請求論文審査報告

「ポストモダンニズムが今日社会科学に徘徊している」(P・ローゼナウ)。これは、マルクスの有名な言葉のパロディ化であることは一目瞭然だが、我々がポストモダンニズムを論じる書物を手にするとき、必ず出会う一種の *cliche* であるといつてよい。それほどまでに、ポストモダンニズムはモダンの既成の知識への不気味な挑戦となつて、現代の人間諸科学に大きなインパクトを与えてきたことは疑いの余地がない。とは言つても、「ポストモダン」という表現が一体何を意味するのか、その「正統性」「思想系譜」、もしくは「時代区分」にいたつては、建築・絵画・文学・哲学のそれぞれの領域において、またアメリカ・フランス・ドイツ等々によつても異なる。我が国においても六〇年代末から七〇年代にかけて、とりわけフランスのポスト構造主義者たち(ラカン・デリダ・フーコー等)の著作が相次いで紹介されだした頃から、そうした議論が囁かれるようになった。ともかく「ポストモダン」が何か新しいもののムードとしてではなく、その概念および内容として「モダ

ン」に対する *Gegensatz* として輪郭づけられ、ひとつの自己意識的な、ポストモダンの知としての独自性を主張してみせたのはリオタールの *La condition postmoderne*、1979 の出版以降であることは間違いないであらう。

ところで、議論を政治学の研究の領域に限定してみると、ポストモダンニズムの受容は、その隠喩や定理を文化的な要求としていち早く取り入れた、いわゆる *Kulturpolitik* のジャンルを別にすれば、政治学の思想的伝統にはもとより、その固有のテーマにまでその射程が及んだのは、意外と遅かつたのではないか。勿論、論者によつて意見は定かではないが、ポストモダンニズムが政治理論に重要な影響を与えるようになったのは比較的最近のことで、少なくとも八〇年代に入ってからである。そして、そのポストモダンの転換ともいふべきものに中心的役割を演じたのは、アメリカの政治学者たちであった。そこで生み出された研究や論争は、ヨーロッパのおびたしい数の文献をも含めて、膨大な量にのぼる。それらのテーマも、万華鏡のように、変転きままらない。どれが最も重要であり指導的な傾向か、その学者と文献を挙げることは、それこそ偏見なくしては不可能に近い。今ここでは我が国においてもすでに紹介され、評判の高い学術書として、W・コノリー『政治理論とモダ

ニティ』(一九八八年)と、S・ホワイト『政治理論とポストモダニズム』(一九九一年)を挙げるにとどめたい。

前者は、ポストモダンの概念によって、ホッブズからニチエにいたるまでの政治思考を再読したものであり、後者は、ポストモダンの他者性への行為責任と後期ハイデガーの「他者を差異のままにあらしめる」「独自の「他者の責任」という姿勢のもとに「支配なき知のモラル」の在り方を示したものである。ちなみに、向山君は本書の訳者のひとりである。

さて、向山君によって提出された論文「ヘテロトピアと差異の政治学」は先ずその序論において、ホワイトにならって、『ポストモダンの問題構制』を次の四つの局面に指摘している。(1)メタ物語への不信感の増大、(2)社会的合理化の危険に関する新しい認識、(3)新しい社会運動の台頭、(4)情報テクノロジーの飛躍的発達。これらを現代の政治状況のコンテクストにおいてパラフレーズすれば、(1)は解放の物語としてその地位を誇示してきたマルクス主義の失墜であり、啓蒙以降の進歩の歴史哲学への信仰の没落である。(2)は、福祉国家化と「鉄の檻」(ウエーバー)としての官僚制の肥大化、それに伴う「生活世界の植民地化」(ハーバーマス)の問題である。以上の反動として、(3)はフェミ

ニズムや先住民運動などにみられる民衆レベルでのローカルな自律性への要求である。(4)は近代国家の領域性を越えたグローバルなコミュニケーション体系の確立として位置づけることができる。こうしたポストモダンの政治状況からみて、モダンの政治学がめざしてきた「普遍性」と「人間解放」という理念、および領域主義的な「国民国家」の形成(リベラリズムとデモクラシー)はまさに大きな岐路に立たされていると言わざるをえない。以下に見るように向山君は、ポストモダン思想によって問題化された「モダニティ批判」を深刻に受け止め、政治学においてこれまで自明なものとされてきた制度や価値、それらを支える近代的思想をラディカルに——政治的な、したがってイデオロギー的な、右翼・左翼のコンティニューアムを打破して——問い直していく。ポストモダンのいえば、「脱構築」していくのである。

ここでもうひとつ付言しておくべきことは、向山君のいう「ヘテロトピア」なる概念に関してである。それは、フーコーの「混在郷」(『言葉と物』から採られたものであるが、「均質の空間」としてのユートピアに對置された「異質なものが混在する不安定な空間」を意味する。向山君はそれをさらに敷衍して、ユートピアに對立するヘテロ

トピア概念は、「マルクス主義に見られた〈完成〉という目的論的な思考形式を拒否し、常に〈他者〉に定位することによって〈目的の終焉〉なき〈変容〉のプロセスを指向するものである」という。ヘテロトピアは自由の契機として境界を侵犯し、この「侵犯」としての社会批判は自己を「無限の世界における有限な存在」として、つまりバルナラブルなものとして認め、「他者」へと開かれることによって、ポストモダン的な倫理の実践に結びつく。かくして、「ヘテロトピアとは絶えざる関係変化のプロセスの別名に他ならない」。それゆえに「ユートピアからヘテロトピアへ」という社会空間のイメージの変化は、向山君によれば、「マルクス主義からポストモダニズムへ」という政治学の「パラダイム転換」とパラレルに位置づけられるのである。ついで、向山君の論文を個別に検討することとするが、その構成を示せば次頁のとおりである。

序論…ユートピアからヘテロトピアへ

〔Ⅰ〕変容するマルクス主義

第1章 ヘゲモニーと「主体化」の政治学

- 1、政治概念の変容
- 2、市民社会とヘゲモニー

- 3、イデオロギーの主体化作用
- 4、マルクス主義の限界とフーコー
- 5、知識人の役割

第2章 ポスト・マルクス主義の地平

- 1、構造主義以降のマルクス主義
- 2、「マルクス主義」批判のマルクス主義
- 3、アルチュセール以降のブログレマティーク
- 4、「言説的全体性」の可能性と限界
- 5、社会の不可能性／民主主義の可能性
- 6、「啓蒙」とポストモダンの邂逅

第3章 ナショナリズムと「他者」

- 1、「政治的なもの」の回帰
- 2、「民族＝国民」という概念の空虚さ
- 3、「民族浄化」の心理機制
- 4、資本主義とゲマインシャフトの願望
- 5、さらなる疎外としての民主化のために

〔Ⅱ〕ポストモダンの政治戦略

第4章 ヘテロトピアとしての対話空間

- 1、モダンの「危機」と「批判」
- 2、「啓蒙」と「ポストモダン」の狭間で
- 3、抵抗のポストモダニズムに向けて

第5章 解釈的理性と「共同体」パラダイム

- 1、ポストモダンと「理性」概念の変容
- 2、「立法的理性」と解釈的理性
- 3、政治哲学における「共同体」への接近
- 4、ポストモダンにとって「共同体」とは何か？

第6章 多文化主義と「差異的政治学」

- 1、正義論における「他者」問題
- 2、自由主義と「承認的政治学」
- 3、ポストモダンと「差異的政治学」
- 4、社会主義と「脱構築」の正義論
- 5、「承認」の闘争理論に向けて

〔Ⅲ〕「解放」を越えて

第7章 権力批判の文法—ブルデュー読解

- 1、権力論の系譜
- 2、ブルデュー権力理論の諸前提
 - ・デュルケーム「集合表象」概念の受容
 - ・マルクス階級理論Ⅱ価値形態論の受容
 - ・ウェーバー「正統性」概念の受容
- 3、コード化に抗するハビトゥスⅡ戦略
- 4、エピソード—伝達から対話へ

第8章 脱植民地化の思想—フレイレ再読

- 1、現代に〈エクソダス〉の神話は甦るのか？
 - 2、植民地化のディスコース—認識の帝国主義
 - 3、「解放」をめぐる二つのパラダイム
 - 4、〈エクソダス〉の共同体構想のために
- 結論…「ディアスポラ」からの出発

第1部は、左翼にとって依然としてイデオロギー的残滓であるマルクス主義の閉塞性——あらゆる「差異」を同質的な「階級」概念に還元すること——を乗り越えるための試みが展開されている。第1章「ヘゲモニーと〈主体化〉の政治学」は、マルクス主義の経済決定論の限界を指摘するために、先ずグラシムの「ヘゲモニー」概念の問題設定から、「上部構造」の自律性を論ずる。グラシムは「市民社会」を「国家」とは区別される権力装置として位置づけたが、それは、市民社会における諸個人が支配的な規範に「順応化」されるプロセスを明確に認知するためであった。向山君は、これとパラレルな問題設定をアルチュセールおよびフーコーの「主体化Ⅱ従属性」のメカニズムへと一層発展させ、それによって「土台Ⅱ上部構造」ではもはや説明しえない日常実践の中に隠された、理論的なフレイムの再構成を試みている。そして向山君は、「前衛」ないし

は「左翼」とみずからみなすポストモダンを越えた、階級闘争に還元不可能なミクロの闘争のうちに照準をあわせた知識人と政治のアンガージュマンの在り方を認識しようとする。

第2章の「ポスト・マルクス主義の地平」は、ラクラウ・ムフの『ヘゲモニーと社会主義戦略』を主要テキストとして、いわゆるポスト・マルクス主義の思想的複合体を探究したものである。ここでは、伝統的なマルクス主義の還元論的問題構成を、構造主義以降の思想展開から批判し、新しい社会運動形態にみられる「偶発的かつ多元的な闘争」を表現するための理論的方法が模索される。向山君は、ポスト・マルクス主義の問題関心が、個人にも全体にも還元されない関係論的カテゴリーに基づくものであって、その政治理論の可能性をフーコーやラカン、ポストモダンの思考に對置している。しかもラクラウ・ムフの場合は、「啓蒙」に依拠する民主主義的価値の発展深化にも注目しつつ、モダンとポストモダンを架橋する共存可能な関係をもなおざりにされていない。

第3章「ナシヨナリズムと〈他者〉」は、社会主義崩壊後のエスニック・ナシヨナリズムの問題をラカン・ジシエックの精神分析的方法によって説明したきわめてユニークな

論考である。いかなる（集合的）アイデンティティといえども、それ自体で完結するものでは決してなく、「われわれ」という觀念形象には、つねに「他者」の創出と排除をともなう。このラカン・ジシエックの理論は今日のナシヨナリズム現象のもつ深層構造を批判的に分析するひとつの視点を提供する。こうして向山君は、自己完結する共同体という幻想の危険性を暴露する。と同時に、ポスト・マルクス主義において提起された関係概念から、共同体の絶えざる再生というロジック（それは善かれ悪がれ、選挙というシステムに具体化される）を内在化させた唯一のポリティクスとして、デモクラシーの可能性を考察している。ここで、ジシエックのディスコースが、東欧のナシヨナリズムに関連して、ナルシシズムに囚われた「純粋な閉じられた共同体の妄想」であること、そしてそれに対する「民主化への提言」である、と読みとられていることは興味深い。

第II部「ポストモダンの政治戦略」では、モダン／ポストモダンの対立図式を明確化したうえで、今日の政治哲学において、「他者性」の問題がいかに問われているか、そのテーマと内容が提示されている。第4章「ヘテロトピアとしての対話空間」においては、政治思想の争点の一つである「啓蒙」と「ポストモダン」の対立が、ハーバーマス

とリオタールの論争を導きの糸として明快に図式化されている。両者の相違は、「対話」実践における形式的規範Ⅱ普遍性の必要性か、それとも異質的なものを前にしての自己変容の可能性かという対立点に見出されよう。向山君は、後者を支持する立場から、異質性のコンフリクトとは相互に排除しあうものではなく、マルクスⅡバフチンの交通Ⅱ対話形態の導入によって、自己の絶えざる「差異化」を実践する「闘争Ⅱ変容」モデルであることを提示している。モダンの同一性原理に依拠したハーバーマスのなコミュニケーションの理性の「コンセンサス」形成ではなくて、ヘテロトピア（差異の空間）における対話倫理の在り方が積極的に示されているところは、向山君の考え方の基調を最もよく特徴づけている。

第5章「解釈的理性と〈共同体〉パラダイム」では、先ず現代社会科学における「理性」概念の変移を、S・パウマンにしたがって「立法的理性」から「解釈的理性」へ、と位置づけ、向山君の言葉に直せばそこに「管理する知」から「対話する知」へのパラダイム転換を見据えている。向山君は、ガダマーをはじめとしてオークショット、シェルドン・ウォーリン、リチャード・バーンスタイン、ローティなど、現代政治哲学者たちの言説にみられる解釈学的

方法を緻密に検討しながら、伝統としての「対話」を重視する実践知としての共同体主義の方向性を明らかにする。

向山君は、パウマンの問題設定をとおして、近代国家形成とともに成立したカント的理性に垣間見られる、知の一元性と統合性の境界と、それに対する解釈的理性によるローカルな知および異質な伝統に基づく相互コミュニケーション的な知とを対比させ、後者に優位的地位を与える。パウマンの書の「あとがき」において向山君自身が明確に語っているように、啓蒙的理性の「立法者」から理性の「解釈者」へのメタファの移行——その思想史の弧線の内部に現代における知識人と文化の変貌が認められるであろう。知識人はもはや来るべきものの道徳的確信を欠き、いかなる普遍性へのプロジェクトをも断念せざるをえない。だが、そのことは、彼らの「文化」から「権威」を追放し、みずからの文化の固有性と、文化の相対性の自覚化を促すこととなる。このような意味で、知識人の文化批判 (Kulturkritik) の重要な役割が見透されているあたりは、向山君の炯眼というべきであろう。

次の第6章「多文化主義と〈差異の政治学〉」は、あらたに書き下された論文であり、やはり今日政治哲学者の間の最大の問題の一つである、リベラルⅡコミュニタリアン

論争、とりわけ「正義論」について考察がなされている。

ここでは先ず、チャールズ・テイラーの多文化主義の問題から「承認」のパラダイムがとりあげられているが、テイラーの議論は同質的な他者Ⅱわれわれとして一般化されたものにすぎず、結局は、西欧文明の「地平の拘束」を免れていない、と批判される。向山君は、「異教の政治学」から出発するリオタール、およびマリオン・ヤングの思想から導き出された具体的差異性と多文化、集団間の関係性のもとに位置づけられる「正義の多様性」に有効な活路を見出そうとしている。さらにナンシー・フレージャーの議論を援用して、階級・民族・ジェンダーをめぐる「不正義の線分の交差」のただなかにわれわれは生存していること、それゆえにいがなるアイデンティティをも特権化することなく、不正義に敏感であることこそ「他者への責任」を引き受ける「承認」の正義なのであって、その正義の弁証法を生きる生き方を確認する。そして、その新しい運動形態は、まさに「差異」に開かれたダイナミックな連帯へと変換されなければならない、と。

第三部「解放を越えて」では、マルクス主義的な権力論を越えた、抑圧Ⅱ解放のパラダイムの可能性を実験的に考察している。第7章「権力の文法―ブルデュー読解」は、

彼の「発生論的構造主義」の問題構成を、デュルケムⅡマルクスⅡウェーバーの全体化権力論に対置する。そして、ブルデューの「象徴権力」概念とは、これまで対立してきた主観主義と客観主義の立場の統合をめざす可能な視点を提示したものであることを明示する。構造化された権力関係、あるいは「権力のコード化」に対して、ブルデューの提唱する「ハビトゥス」という対抗概念は、コード化を揺さぶる戦略的作用を有しているのである。

第8章「脱植民地化の思想―フレイレ再読」は、これまでの解放理論のパラダイムを決定的に規定してきたヘーゲルⅡサルトル流の思考様式を越えて、新しい解放戦略を「対話」の理念のなかに求めている。向山君は、ブラジルの思想家フレイレの著作を批判的に読解することによって、疎外論的な抑圧Ⅱ解放の古典的な思想の限界を論証する。すなわち、解放の「普遍性」は万人に共通した抑圧状態を前提としており、そこでは、植民地状況が逆に一元化され、男性と女性、白人と黒人、その他のエスニシティの重層的構造なるものが隠蔽されてしまう。西欧とそのディスコースが構成したオリエンタリズムとともに解放するには、西欧的な「弁証法」の論理に代えて、対話の持つ「自己差異化」運動の解放的ポテンシャルを仮説的にせよ、想定し

てみなければならない。自己同一性の原理、価値のヒエラルヒーを壊乱する「混血的な」対話実践、それこそがポストモダンの差異化と分節化に照応して、西欧的表象のなかで他者化された人々の復権、そして新しいエクソダスⅡ脱出の共同体の構想を可能ならしめるであろう、と向山君は論じる。

以上のように、本論文は、マルクス主義の理念Ⅱ現実的崩壊を起点としてモダニティの限界を探り、ポストモダニズムの知の多彩な展開のなかに、それを乗り越えるパースペクティヴを見出そうとする試みである。既に述べたように、向山君は、今日政治哲学や社会思想の領域において提起されているテーマをポストモダンの問題関心と絡ませて読み換え、ポスト・マルクス主義、リベラル・コミュニティアン論争、そしてポスト・コロニアニズムへと鋭く迫っている。彼の政治戦略は、近代理論における大文字で書かれた主体 (Sujet) とか市民 (Citoyen) の特権化に対抗し、「差異」と「他者性」の概念を導入して、それらによって分節化される対立を隠蔽することなく、「対話」を契機とした多面的な政治と倫理の活性化を求めようとする。向山君の眼差しは、アクチュアルな問題状況に注がれ、

人々の「自己変容」と「闘争」がもたらす意味生成によって構成される特殊な言語空間を読み解こうとしているのである。

こうした向山君のあらゆる試みのなかには、モダニティのそれと肩を並べる政治の問題解決の方途とか、歴史の世俗内の救済論のパラダイムなどを見つけたすことはできない。スチュアート・ホルルの言葉を借りて、向山君は「結論」を「ディアスポラからの出発」としているが、それこそが彼の時代体験であり、時代診断なのであろう。「ディアスポラ」は帰るべき「故郷Ⅱ起源」をもたないために、いつさいの「目的Ⅱ終焉」に懐疑の眼差しを向けることができる。「ディアスポラ」は「他者」との関わりにおいて、「他者」を「自己」可知性の領域に閉じ込めるのではなく、そうした領域のリミットを明らかにするものとして、「他者」に向かい合うことができる。われわれはこうした「他者」とのディアスポラ的な「近さⅡ隔たり」の中からポストモダンの知／政治の倫理を汲み上げていかなければならない」という言葉で、この論文は結ばれている。

この言葉は、ポストモダンの倫理的なインペラティブとして厳しく受けとられるべきであらう。もっともここで、向山君自身は、「政治のポストモダン化」をわれわれに要

請しているわけではない。むしろ、時代の特徴を問題化すべく、「ポストモダンの政治理論化」への努力をみずから要求しているのである——国家、共同体そして個人の諸位相、さらには歴史と伝統、人種とジェンダーというものに身を置きながら、他面において、こうした集積それ自身がそれこそディアスポラであり、拡散された、価値解体的なイメージであるかのように映ることも否定できない。この「部分」理論を包摂するような、総体としての意味解釈 (Gesamtheitung) といったものを探究すること、それが今後の課題として、向山君に残されているであろう。われわれとしては、ディアスポラをディアスポラのままにあらしめ、これを「承認」することが、かえってこの論文全体についての相応しき評価であると思われる。したがって、向山君が次世代を担う有為な学究として、一層大胆にして犀利なポスト・ポストモダンの理論再構築へと折り返してゆくであろうという期待をこめて、われわれは、この論文におのずから発揮された研究活動と意欲、とりわけその研究業績にあらわれたテーマの斬新さに対して、法学博士 (慶應義塾大学) の学位を授与することが妥当である、と判断するものである。

平成八年十二月一三日

主査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員法学博士	奈良和重
副査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員法学博士	陸山 宏
副査	慶應義塾大学名誉教授	内山秀夫